

| お 名 前             | 性 別 | 終戦時の年齢 | 現 住 所            |
|-------------------|-----|--------|------------------|
| 藤野 よ志乃<br>(旧姓 高柳) | 女 性 | 1 6 歳  | 新城市町並<br>(豊川市一宮) |

## 「海軍工廠 ～ 爆風で全身傷だらけに」

私は新城高等女学校32回生として、昭和16年4月に入学しました。私の実家は一宮町松原で、同級生の子と一緒に長山駅から新城高女に通っていました。当時は新城駅で降り、今の新城中学校にあった女学校まで歩いていきました。鳳来や北設から通う子は、東新町で降りることに決められていました。



全校体操 第30回記念絵葉書より

女学校時代で楽しかったことは、体操でフォークダンスを踊ったことや田原の江比間に臨海学校へ行ったことです。臨海学校へ行ったのは、私たちの学年が最後になったそうです。

3年生になると、だんだん軍事色が強くなり、体育は体錬科となり、竹槍訓練のような軍事教練もありました。勤労奉仕もあり、農繁期に東郷村の農家へ手伝いに行ったり、豊川海軍工廠へ研修で勤労奉仕に行ったりすることもありました。また、外国語の使用が禁止され、ドレミファソラシドをハニホヘトイロハに代えて覚えることになりました。

### ○ 豊川海軍工廠へ

昭和19年4月、私たち4年生108名は豊川海軍工廠へ動員学徒として配属されることになりました。私が配属されたのは、総務部庶務課でした。朝8時から17時までの勤務で、夜勤はありませんでした。長山駅から飯田線で工廠への引き込み線で西豊川駅まで行きました。駅を降りると、新城高女が集まって点呼をとり、総務部庁舎まで並んで歩いていきました。「歩調をとれ！」という合図できちんと行進したことを覚えています。浅見巖先生と鈴木とよ子先生は、付き添いで私たちの面倒をみてくれていました。それぞれの職場まで送ったり、労務係へ報告をしたりする任務があったので点呼はとても重要だったようです。

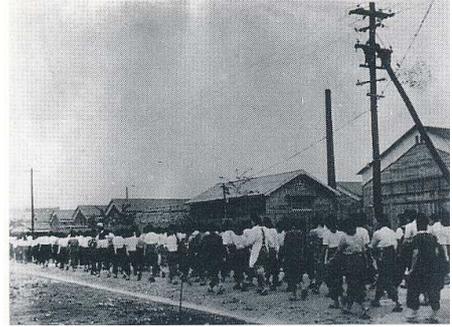


新城高等女学校の正門

総務部には、仲のよかった山本文代さん、田中栄子さんが警務係で入り、同じ部屋のすぐそばで仕事をしていました。中野千鶴子さんは文書係で、工場長のすぐ隣の部屋だったように思います。

後で知ったのですが、庶務課は一番恵まれた仕事だったようです。油だらけになることもなく、他の職場のように厳しい工員さんもいなくて仕事も楽だったからです。仕事の内容は、タイプを打ったり書類の整理が中心でした。

服装は、最初のうちは新城高女の制服や私服でした。その後に配給されたのは襟のついた国防色の上下服が1着だけで、桑の皮で作った着心地の悪いものでした。ですから、着られれば私服でも制服でも何でもよかったようです。履き物もまちまちで、私は下駄履きでしたが、ズックだったりわら草履だったりでした。



通勤風景 ミュージアム提供

## ○ 運命の8月7日

その頃は、豊橋や岡崎や浜松も空襲に遭っていましたが、そろそろ豊川も危ないのではないかとうわさしていました。みんなに聞かれるような場では言えませんが、私の家でも父母がそんな心配をしていました。

空襲は、仕事が始まって間もなくでした。10時13分から26分間とされていますが、いきなり空襲が始まって、とても長い時間のように感じました。空襲警報で退避命令があった時には、もう爆弾が落ち始めたように思います。大混乱で、私はその時のことをあまりよく覚えていません。避難が遅れたことは確かです。庶務係の避難が遅かったのかもしれない。近くの防空壕にいったん入ったように思いますが、覚えているのは正門を出る時からです。500ポンド爆弾の大きな穴があちこちに空いていました。目をそむけるようにしましたが、首のない体やちぎれた腕や足、内臓も飛び散り、遺体が散乱しているのを目にしました。もうもうとして、正門もよく分からないほどでしたが、夢中で廠外に出ました。B29の轟音と「ヒューッ、ヒュー」と爆弾が次々と落ちてくる音が聞こえたので、何度も地面に伏せたとします。生きた心地はしませんでした。気づいた時は工場神社（現在の平和の像付近）で身を伏せていました。

私は、その間に爆弾の破片を浴びたり、爆風で足の肉をそがれたりしました。その時はしびれるような、鈍いような感覚でした。空襲がやんで我に返ると、もう死ぬほどの痛みというか、表現しようのないすごい痛みを感じました。動けなくなって、ただじっとしているだけでした。

その後は気を失ったようですが、国府の高等女学校へ運ばれていました。きちんとした手当てをしてもらった覚えはなく、長い時間放っておかれたように思い

ます。大勢のおおぜいの人がケガをしたので、手当てが間に合わなかったんだと思います。

## ○ ズタズタの体になって

私の背中には、まだ爆弾の小さな破片が3ヶ所残っています。左肩には大きな破片がありましたが、昭和40年代の前半に手術で取り除きました。その時の大きな傷跡が今も残っています。右足のふくらはぎは、爆風で10cmほどえぐられたように筋肉が無くなっています。足の形も変形してしまって、娘盛りの体がズタズタにされてしまいました。

新城高校の記録には、「左肩胛部左大腿部爆弾弾創、右腓腸部弾片創、治療期間10ヶ月」と記されているそうです。国府高等女学校の救護所で長い間治療し、自宅に戻りました。その後は父親の勧めもあり、自立するためか、傷をいやすためか、華道、裁縫などの習いごとをしました。そして、昭和24年に結婚し、普通に家庭生活を過ごすことができました。

でも、爆弾の破片や傷跡は決して消えることはなく、今も疼くのです。戦争の傷をずっと背負っているわけで、私は生きている限り癒されることはないのかもしれないかもしれません。それほど、あの時の空襲には計り知れない重さがあります。どれだけ多くの人に、深い傷跡や悲しみを残したのでしょうか。

## ○ 中野千鶴子さんのこと

千鶴子さんはが亡くなったことは、実家が隣なのですぐに知りました。母親が知らせてくれたんだと思います。家族に看取られたそうですけど、遺体は軍属だという理由で、埋葬できずに諏訪墓地に仮埋葬されたそうです。千鶴子さんが大事にしていたひな人形を遺体代わりに、葬儀を営んだそうです。

千鶴子さんは、小さい頃からとてもしっかりした子でした。負けず嫌いな面もあって努力家、明るく元気で、運動や裁縫が得意でした。亡くなられた伊東幸子さんや、川北緑さんと仲がよかったと思います。

防空壕で爆弾の直撃に遭い、一人だけ奇跡的に命を取り留めていたそうですが、爆弾の破片が破裂した水道管の破片が脇腹に刺さり、その傷が原因で翌日亡くなったそうです。家族に看取られて亡くなったので、まだ幸せだったと言われていますが、両親は悲しみはとて深く、何年経っても千鶴子さんの死を受け入れることができなかつたようです。お父さんは、その悔しい思いを私にも語られたことがあります。

私は後年、千鶴子さんを思って短歌を捧げました。

「青春を 祖国に捧げし 戦闘日誌 水水水と 命のさけび」



作業服姿 右は中野千鶴子さん